

JB



サヴァナ

楽園に棲む妖しい人びと

ジョン・ベレント 真野明裕訳

Midnight in the Garden
of
Good and Evil



Riverside Press

早川書房



Riverside Press

まよなか
真夜中のサヴァナ (下)

一九九五年七月十日 初版印刷

一九九五年七月十五日 初版発行

著者 ジョン・ベレント

訳者 真野明裕 (まの あきひろ)

発行者 早川 浩

発行所 株式会社 早川書房

住所 101 東京都千代田区神田多町二二

電話 〇三・三二五二・三一一一 (大代表)

振替 〇〇一六〇・三・四七七九

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
〈検印廃止〉

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

ISBN4-15-206014-X C0098

真夜中のサヴァナ

(下)

—— 楽園に棲む妖しい人びと

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1995 Hayakawa Publishing, Inc.

MIDNIGHT IN THE GARDEN
OF GOOD AND EVIL

by

John Berendt

Copyright © 1994 by

John Berendt

Translated by

Akihiro Mano

First published 1995 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan by

arrangement with

Midnight in the Garden, Incorporated

c/o International Creative Management, Inc.

through The English Agency (Japan) Ltd.

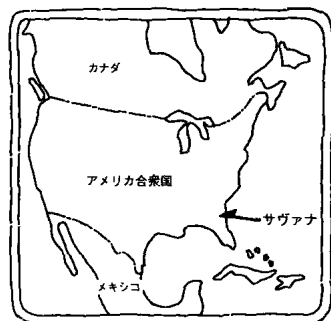


夜の噴水——フォーサイス公園

HAYAKAWA presents
Citywalkers in Savannah®

[illegible]

サヴァナ・マップ



- 1 マーサー邸
- 2 リー・アドラー邸
- 3 テンプル・ミクヴェ・イスラエルのシナゴーグ
- 4 ジム・ウィリアムズの骨董店
- 5 サリーナ・ドーズのタウンハウス
- 6 アームストロング邸
- 7 オウグルソープ・クラブ
- 8 フォーサイス・パークサイド・アパートメンツ
(著者は本書の多くの部分をこの住居で書いた)
- 9 ジョー・オウドムのタウンハウス
- 10 著者の最初のアパート
- 11 ジョー・オウドムの三番目の住居
- 12 ハミルトン=ターナー邸
- 13 クレアリズ・ドラッグストア
- 14 レディ・シャブリのアパート
- 15 コンラッド・エイキンの家
- 16 ハイアット・リージェンシー・ホテル
- 17 ジョー・オウドムの二番目の住居
- 18 チャタム郡裁判所
- 19 クオリティ・イン
- 20 ボナヴェンチュア墓地
- 21 グリニッチ墓地
- 22 ミネルヴァの園

目次

第二部（承前）

14	年間随一のパーティー	10
15	市民の義務	30
16	公判	40
17	床の穴	68
18	真夜中の善悪の園	75
19	ラフアイエット広場、我らはここに	94
20	サニー	105
21	二番煎じに関する覚え書	121

22	蘭 まゆ
23	ランチ
24	黒いメヌエット
25	町の噂
26	べつの言い分
27	ラッキー・ナンバー
28	栄光
29	そして天使たちが歌う
30	その後
	著者ノート
	謝辞
	訳者あとがき

Book Design : Double “O”

Cover Art © Leonard Weber

Printed by permission of International Oasis Art Gallery.



第二部 (承前)

14 年間随一のパーティ

十二月第一週に、サヴァナの上流家庭の郵便受けに、ジム・ウィリアムズ主催の準正装^{ブラック・タイ}クリスマス・パーティへの浮出し印刷による招待状が届きはじめた。事情が事情だから、ウィリアムズは今年はパーティを一切取りやめるだろうという思いこみがあつたので、招待状を受け取つた人々はびっくり仰天した。招待状を突きつけられて、サヴァナの社交族は冬の最高の社交行事が周知の射殺事件の現場で催され、一カ月としないうちに主催者は謀殺容疑で裁判にかけられるのだという認識と格闘した。どうしたものか？ サヴァナはなによりもまず礼儀作法という土地柄だった。なんといつても、十九世紀末アメリカの社交界の審判をもつて自ら認じたあのウォード・マカリスターの生地なのだ。一八九二年にニューヨークのエリート「四百名」のリストをまとめたのは、ほかでもないウォード・マカリスターだった（以後「フォー・ハンドレッド」は）。このサヴァナつ子は、紳士淑女が守るべき行動規範を成文化した。ウィリアムズが有罪か無罪かをめぐつてすでに火花を散らしていた活発な議論は、焦点がずれて、ウィリアムズがクリスマス・パーティを催すことの是非や、そのパーティに（彼は現にやろうとしている以上）出席することの是非といった問題に移った。今年は、「招ばれました？」ときくかわりに、人々は「いらっしゃる？」かどうかを知りたがつた。

ミリセント・ムアランドはウィリアムズにパーティをしないようにとかねて忠告していた。「それは褒められたことじゃないわよ、ジム」と意見し、招待状がくるまではそれで説得できたつもりでいた。ムアランド夫人に、そのパーティは苦しいジレンマを突きつけた。眠れない夜を何度も過ごしたあげく、夫人はいかないことに決めた。

ウィリアムズは自分のパーティが悪趣味のあらわれかもしれないとは認めようとしなかった。恒例のパーティをやらないのは有罪を自認することになると、自分と弁護士とで判断を下したというのだ。したがって、決行する気だった。ただし、次の晩の男性のみのパーティは割愛する。「それをほんとに淋しがるのはレオポルド・アドラーくらいものだろう。彼は双眼鏡を持ち出してスパイすることができなくなるからな」とウィリアムズは言った。

ウィリアムズはリー・アドラーが表向きは自分のことを心配してくれるようなふりをしながら、その実、地方検事をついて謀殺ということさら重い罪で訴追させたのだと、確信していた。事件の二日後に、エマ・アドラーはウィリアムズに、同情の意を表わし、なんなりとお役に立てればと申し出る手紙をよこしていた。彼女はその短い書状に「情愛^{フョンドン}こめて、エマ」と署名していた。

「フョンドンなんて言葉を使つてると自体、あの手紙が心にもないことを並べ立てただけのもんだと証明してやるようなもんさ。エマ・アドラーは、お互いさまだが、わたしを好いてなんかさらさないし、そのことはお互いわかってるんだからね」とウィリアムズは言った。アドラー夫妻はこの年のパーティには招待されなかった。

例年のように、ウィリアムズは前もってちゃんと周到な準備にかかっていた。助手たちが出かけていて、切り立ての椰子の葉、ヒマヤ杉の枝、モクレンの葉をトラック三台分集め、丸一週間かけてマーサー邸の七つの暖炉と六基のシャンデリアに飾りつけをした。パーティ当日は、ルシール・ラ

イトが豚の腿肉と七面鳥と牛肉のロースト、大量の小海老と牡蠣^{かき}、蓋物に入れたデ IPP とソース、それにたくさんさんのケーキとチョコレート・クッキーとパイを持ってやってきた。彼女はいくつもの銀の皿に豊富な食べ物を盛りつけ、それを食卓の中央に飾ったピンクと白の椿の盛花のまわりに配した。螺旋階段の手すりには全長六十フィートもある花喉の真つ赤な蘭の花綱が垂れ下がっていた。ヒマラヤ杉と松の匂いが邸内の空気にピリツとアクセントをつけていた。

七時きっかりに、ウィリアムズがマナーサー邸の玄関扉を開け、客を迎えるために母親と妹のドロシー・キングリと共に入口に並んだ。女性二人はイヴニング・ドレス姿だった。ウィリアムズは黒の蝶ネクタイとタキシードを着用し、礼装用ワイシャツの袖にはロシア帝室伝来のファベルジェ作のカフス・ボタンがきらめいていた。彼は一つ深く息をついた。「さて、誰が真の友かわかるぞ」長く待つまでもなかった。一番乗りの客たちがすでに歩道を歩いてきていた。

そのあと続々ときた。百人を上回る人数だった。それぞれ、支持を表明する温かい表情を見せてウィリアムズに挨拶してから、書齋に控えた係の者にコートを預けた。初めのうちは雰囲気^{きふく}が沈みがちだったとしても、次々と客が着くにつれて急速に盛り上がった。お仕着せの白い上着を着た給仕たちが酒やオードブルの盆を手に進まわった（「ふんだんに注げ」とウィリアムズはバーテンに言いつけてあった）。まもなく、笑い、はしゃぐ声が大いに高まって、グラランド・ピアノによる演奏をかき消した。ウィリアムズは二百名を招待し、百五十名の出席を自分の目標としていた。その目標を達成したのは明らかだった。少なくとも当人の考えでは、社交族の投票で彼は勝利をおさめたのだ。一時間後、彼は出迎えの列を離れて、客たちに合流した。

「きたのはどういう人たちです？ それにどういう人たちが欠席しました？」とわたしはきいてみた。「殊勝ぶった連中は家にとどまってるね、かねがねサヴァナでのわたしの成功をねたんで、認めてな

いぞとわたしに思い知らせたがつてる連中さ。そのほかに、心からわたしによかれと思っていながら、それを公然と認めるのを恐れてる一部の者も出てきてない。今夜ここで目にする人たちは、こうと自分が決めたことに誰が異を唱えようと無視できるだけのしっかりした考えの持主だ。あそこにいるあのご婦人、アリス・ダウリングのようにね。亡くなったご主人はドイツと韓国駐在のアメリカ大使だった人だ。彼女と話しているのは、マルカム・マクリーンといって、元サヴァナ市長で、サヴァナで一、二を争う法律事務所を主宰している。マクリーンのすぐ右にいる小柄なお婆さんは、サヴァナ歴史財団を創設した七人の女性の一人で、ジェーン・ライト。植民地時代の第三代ジョージア総督の子孫だよ。ところで、その右に白い口髭の、いかにも風格のある人物が見えるね。あれはボブ・ミニスで、サヴァナでも指折りの頭の切れる、有力な金融人だ。四代前の先祖はこの州で最初に生まれた白人でね。彼はユダヤ人だ——名門のジョージア・ユダヤで、オウグルソープ・クラブの唯一のユダヤ人だよ。その右の、ドアのところで話をしている二人はリバティ国法銀行の元頭取ジョージ・パタースンと、アトランタの大手投資銀行ロピンスン・ハンフリの元会長アレグザンダー・イアリだ」ウイリアムズはポーカードエースを四枚とも握った人のような顔つきをした。

「それからと、あそこのピアノのそばにいる真つ赤なドレスの、コントラルトの声のご婦人ね」ウイリアムズがつづけた。「彼女はヴェラ・ダットン・ストロングで、例によつてのべつ幕なししゃべつてゐる。パルプ材で財をなしたダットン家の跡取りで、アーズリ・パークの御殿みたいな大邸宅に住んでる。大使館にふさわしいくらいの建物だ。ヴェラは折紙つきのブードルを飼育してる。十二匹ほどいて、少なくともそのうち七匹は彼女と夫のカーヒルといっしょの寝室で寝るんだよ。目下たまたまヴェラの聞き手になつてゐるのは、テルフェア美術館の館長アレグザンダー・ゴウディエリで、これは幸いってもしんだね、なにしろ彼女は彼に口をはさむ暇を与えつこないし、どのみち彼の言うことな

んか誰も聞きたがりやしないんだから」

ヴェラ・ストロングと美術館長のそばを通りしなに、会話の切れ端が耳に入った。「血統が両方ともそりや素晴らしいのよ。あの子の立居振舞いを見せてあげたいくらい。穏やかな気性で、澄んだ目をしてましてね。とても賢いんですのよ」とミセス・ストロングが言っていた。

「また犬の話かい！」とウィリアムズが割って入った。

「誰が犬のことなんて言いました？」とミセス・ストロングは言い返した。

「とぼけちゃいけないよ、ヴェラ。素晴らしい血統……穏やかな気性。あなたがまたブードルを手に入れたって誰もねたみやしない。さあ、さあ。白状しまえ！」

ヴェラ・ストロングは急にハッと息を呑んだ。「まあ！　なんてきまりが悪いんでしょ！　わたしはピーターのフィアンセの話をしたのよ。息子が結婚するの！」彼女は頭をのけぞらせて、笑った。それからウィリアムズの腕をしつかとつかんだ。「わたしがさっき言ったこと、誰にも言わないと誓わなきゃだめよ！」ウィリアムズに秘密厳守を誓わせておいて、彼女は横に立っているカッブルに向き直った。「あれ、お聞きになって？　わたしがピーターのフィアンセの話をしてるところをジムに立ち聞きされて、それがまったくお恥ずかしかったらなくて、わたしったら……」

ウィリアムズは脇を向いた。「まあ、あれがヴェラ・ストロングらしいところでね。彼女の数ある取り柄の一つはユーモアのセンスさ」

「ところであの二人」立派な風采の中年の男女のほうへ顎をしゃくって彼が言った、「あれはロジャー・モウルトリと奥さんのクレアだ。彼は十五年ほど前までサヴァナ・ガス会社の社長だったんだが、夫妻でちよとしたスキヤンダルに巻きこまれてね。ある晩、二人は川ぞいの人目につかない場所まで出かけてって、車を駐めてたんだ。夜警が通りかかって、造船所かなんかの構内に不法侵入してい